

ボストン日本人学生会の記録

三好 彰

『東日本英学史研究』第 12 号

2013 年 3 月 抜刷

資料調査

『ボストン日本人学生会の記録』

三好 彰

はじめに

アメリカ合衆国マサチューセッツ州のボストン地区で学んだ日本人とその周辺の人々を記した4冊のノートがある、ノートに表題は書かれていないが本稿では『ボストン日本人学生会の記録』と呼ぶことにする。

最初の記事は1908（明治41）学年度であり、最後は1953（昭和28）学年度であり半世紀近い期間に及ぶ。太平洋戦争をはさんだ数年分など記録の欠けている時期もあるが、それはそれで日米交流の歴史の一面を物語っている。

明治末期にハーバード大学やスタンフォード大学など一つの大学の内の日本人会が活動していたが、大学をまたがった留学生の活動の記録は珍しい。ボストンは歴史を誇る学術都市であって優秀な日本人留学生がボストンを目差したが、大学の枠を超えた集会を行うに程よい人数が居たことが背景にある。

この『ボストン日本人学生会の記録』には学生ばかりでなく、学業を指導したアメリカ人とともに学生を支えたアメリカ人と在留邦人が出ており全体で800人を越える。著名人も多数見受けられるが本書中では敬称を略す。なお留学生の帰国後の職業を分かる範囲で記す。日米関係の一面を表している留学生の活動が見てとれる。

1. 記録集が日本に届くまで。

1.1 鶴見俊輔と『ボストン日本人学生会の記録』

戦前にハーバード大学で学んだ鶴見俊輔は著書『北米体験再考』¹⁾で次のように、『ボストン日本人学生会の記録』のことを述べている。

連邦捜査局にふみこまれた時、私の部屋からとられた荷物の中には、ボストンの日本人学生会の記録もあった。それは、そのころこの地方には日本人留学生がほとんど残ってなくて、本城（今の東郷）文彦が会長、私が書記ということになっていたためだが、ひきわたされたその記録には、歴代のこの地方の日本人留学生の名前が出ていた。小村寿太郎とか金子堅太郎・池田斉彬の時代のものではなかったが、はじめのほうに山本五十六の署名があったのをおぼえている。

そうして鶴見俊輔は『北米体験再考』から40年近く間を置いて出版した上坂冬子との著作『対論 異色昭和史』²⁾で、次のように述べている。

留学生名簿はFBIが私のところにきた時に没収されたが、いまはハーバード燕京研究所にあるそうです。私は戦後は一度もアメリカに帰っていませんから現物は見てませんが、『パール判決を問い直す』（講談社現代新書）という本を出した中島

岳志が実際に見て確かめてくれました。私はコピーで見ている。早速、中島岳志と連絡を取ったところ、「ハーバード大学に鶴見の署名が入った旧蔵書はあるが『ボストン日本人学生会の記録』は含まれていない」旨の回答を得た。鶴見の勘違いである。

1.2 『ボストン日本人学生会の記録』の再発見

『ボストン日本人学生会の記録』の戦後最初の記事は英文で次のように書かれている。

July 1951

This book was discovered among the possessions of the late Dr. S. Fujishiro who passed away in Tokyo on September 17, 1946. With every best wish that friends far from home may continue to meet in Cambridge and serve as ambassadors of goodwill between Japan and America, I here return this volume to The Japanese Students at M.I.T.

Motoko Fujishiro

この記事を書いた Motoko Fujishiro (藤代素子、結婚後 Motoko Fujishiro Huthwaite) は現地生まれの二世である。日米開戦のために両国間で相手国に居住していた両国民を交換しあった日米交換船³⁾で帰国したが、戦後すぐに留学していた。この種の資料は太平洋戦争が始まってからは持ち帰ることが許されなかった。

この『ボストン日本人学生会の記録』を藤代素子から譲り受けたのは野島豊志(弁護士)である。藤代素子が MIT の日本人学生に戻すと書いているのは戦前最後の記事が書かれたノートの扉に「このノートは MIT 日本人学生会のもの」(This book belongs to The Japanese Student Club of M.I.T.) と書かれているからであろうが、実は野島はハーバード・ロー・スクールで学んでいた。藤代にすれば日本人としての一体感で所属大学は気にするまでも無かったのだろう。野島は上記の藤代の英文の記事に続けて、次のように書いている。

偶然藤代素子嬢に出遭った。彼女が其時に戦前のボストン地区日本人留学生会の名簿が見つかったから見せて上げやう多くの知名の士の名が出てゐて面白いからと云ふのであった。(中略) 其後数日して五冊のノートが私の留守中に届けられてゐた。これが此の五冊の日本人留学生記録であった。私は単なる名簿だとばかり思つてゐたのだがこんな貴重な然も一九〇八年以来の記録であるとは予想してゐなかつたので此を手にした時驚きと同時に大いなる喜びをおぼえた。

1.3 行方不明の一冊

野島は上記のように『ボストン日本人学生会の記録』は五冊だと記しているが現存するのは四冊であり鶴見が書記だった頃の記事が見当たらない。

1960 年から長期間ハーバード大学で教鞭をとった板坂元(故人)が現地のボストン日本人会の会報に「ボストン日本人会今昔ばなし」という連載記事を寄稿したが、その最初の記事(1973 年 7 月 5 日号)で上述した鶴見の著書を引用して次のように書いている。

今この文を書いている私の机の上には、「はじめのほうに山本五十六の署名があ

った」ボストン日本人会の記録が置いてあるからである。古びて装幀もボロボロになっている四冊の記録の、いちばん古いものには間違いなく山本五十六の署名が出ている。鶴見の頃の記録は失われている。

というわけで戦後四半世紀経った時点でも鶴見の書いた記事のあるノートは存在しなかった。

1.4 『ボストン日本人学生会の記録』の日本への将来

『ボストン日本人学生会の記録』(四冊)を日本に持ち帰ったのは1984年から4年間ボストン総領事を務めた谷口禎一(故人)である。晩年に病床にあった谷口とコンタクトしたが入手の経緯は思い出せないとのことであった。

病いのこともあって2005年に谷口は初代ボストン総領事の井口武夫(後にニュージーランド大使)に『ボストン日本人学生会の記録』を託した。この時に日本ボストン会(任意団体)の会長であった井口が内容の調査を企画し、筆者が作業にあたった。

2 ボストン日本人学生会の活動

4冊からなる『ボストン日本人学生会の記録』に書き残されている活動状況の概要を記す。時期によって活動にかなりの差があるので時期を区分けし、関係者とコンタクトできた方々を中心として主立った人々を記すが紙面の関係で留学生は各期毎に10人に留める。

2.1 発足時の活動(1908-1912 学年度)

第一回例会が1908年11月1日に開かれて会長(望月松太郎)などの役員を決めたとの記事がある。しかし巻末に1907学年度の名簿があり会長(藤岡信一郎、小学校長)を含めて6名が出ているので、前年度から準備を始めていたようだ。

当初の会員は全員ハーバード大学への留学生であり、その他の大学の留学生が出てくるのは1909年度からであるが準会員であって正会員のハーバードの留学生と区別している。ハーバード大学の日本人学生会が活動の幅を広げて他の大学に声をかけボストン日本人学生の会を立ち上げたと考えられる。

1908年度から名誉会員の制度を設けており、ボストン駐在在日本国名誉領事のウォルコット(Edwin H. Walcott)や東大教授だったモース(Edward Sylvester Morse)等を挙げている。

最初の年会は1911年5月26日に晩餐会として開かれた。正会員6名、準会員2名と名誉会員6名が出席した。

主な留学生は次の通りである。

望月松太郎：初代会長。駐日アメリカ大使館勤務

新井米男：父・新井領一郎はニューヨークで生糸商、ライシャワー夫人ハルは姪

鈴木謙吉：長崎活水学院教諭、同僚に日本初の女性大臣・中山マサ(米国留学)

浅野良三：浅野財閥の創業者総一郎の次男、浅野セメント副社長

益田信世：小田原市長。父・益田孝はハリスに英語を学んだ。叔母に永井繁子

坪内士行：坪内逍遙の甥、早稲田大学教授、女優坪内みき子の父
稲原勝治：正則英語学校で斉藤秀三郎に学ぶ。ジャーナリスト、外交評論家
影山千萬樹：早稲田大学教授（英語）、初代早大バスケット部長
朝永五郎：海軍技師
谷川義男：ボストンのホテルでベルボーイをした苦学生。高等商校の教授

2.2 第一次活動停滞期(1913-1916 学年度)

1913 学年度から 1916 学年度までは活動の記事がない。第一次世界大戦の余波かもしれないが、この大戦のために欧州への留学ができなくなり米国への留学生が増えたことが知られている。そのことがノートとともに保管されていたタイプライターで打ち出されたローマ字の名簿で確認できる。

留学生でないが日本人初のハーバード大学客員教授になった姉崎正治（東大教授）、その後任で儒学を論じた服部宇之吉（東大教授）が留学生のために講演しているのが目につく。

この期の主な留学生は次の通りである。

八木秀次：八木アンテナ発明者
保井コノ：日本人初の女性の博士でありハーバード大学で石炭を研究
高柳賢三：東京帝国大学教授（法学者）
橋本賢輔：海軍技師、MIT で飛行機を研究した最初の日本人
野間真綱：夏目漱石の高弟。七高教授、姫路高校教授、弘前高教授
新渡戸孝夫：稲造の養継嗣、Japan Times 編集長
高垣寅次郎：一橋大学教授（経済学）
栗山重信：東大教授（小児医学）
柿内三郎：東大教授（生化学の先導者）
阿部章蔵：明治生命専務。作家名・水上瀧太郎で『大阪の宿』など

2.3 活発なアメリカ人との交流(1917-1921 学年度)

アメリカ人を招待した茶話会が 1919 年度と 1920 年度に一回ずつ開かれた。それぞれの招待者リスト（80 人と 68 人）がある。アメリカ人ばかりでなく在留邦人も招待されている。さらに日付は無いが 1922 年度の茶話会用の 120 余人からなるリストがある。

そのほかに日本人だけの集会在毎年複数回開かれている、一番多いのは 1919 年度の 8 回である、奇しくも山本五十六（元帥）が留学していた時期である。多いときは 50 人の参加者を数える。この頃になると正会員と準会員の区別がなくなっている。

主な留学生は次の通りである。

山本五十六：連合艦司令長官、元帥
掛谷宗一：東大教授（数学。台数方程式の根に関する掛谷定理）
堀内敬三：音楽評論家
苦米地英俊：小樽高商校長（英語学）、代議士
杉村一枝：早稲田大学教授（英文学）

平野千恵子：ボストン美術館東洋部勤務
山形元治：夏目漱石の高弟、五高教授
山本信夫：住友財閥役員 陶器収集家
竹内孝一郎：海軍技師、中島飛行機
小柳助治：三菱電機、佐賀中学校教諭

2.4 第二次活動停止期(1922-1923 学年度)

1922 年度と 1923 年度の記事は無い。後者は関東大震災の影響であろう。アメリカ人を招待するリストが用意されているが、1922 年度の茶話会が実際に開かれたという記事はない。1920 年に成立した禁酒法は施政者の期待とは裏腹に社会治安を乱す輩の暗躍を促して集会がしにくくなったが、それが記事の無い原因かもしれない。

2.5 キリスト教徒学生会の期間(1924-1929 学年度)

1924 年にいわゆる排日法が成立し日本人がアメリカへ移民することが禁止されたが、このためにアメリカ人と公に交流することがはばかれてアメリカ人との茶話会が行われなくなった。

1924 学年度から 1929 学年度までの期間はキリスト教徒の学生が日本人学生キリスト協会 (Japanese Student Christian Association) として活動しており、その記事が第 3 冊目のノートに書かれている。

最初の内は礼拝のために月例で 20 人程度が集っていた。朝鮮人を交えてアメリカ人牧師ウェルチによる朝鮮問題と題する講演を聴いたことがある、講演の内容は書かれていないが朝鮮におけるキリスト教布教の背景が論じられたと推察される。ウェルチは朝鮮で布教したが、長崎の活水学院の理事でもあった。

1926 年の新年会のことがカリフォルニアで発行されていた邦字新聞に取り上げられており、その記事が糊付けされている。また 4 月にはボストン郊外へハイキングに行っている。

1926 年度の活動からお祈りすることを止めており、月例会も止めて一年に 3 回の茶話会に切り替えている。茶話会には 30 名程度が集っている。

1929 年度から日本人学生キリスト協会を発展的に解消させてボストン日本人学生会 (Greater Boston Japanese Students Association) に改変することになったことを伝えて第 3 冊目の記事は終わっている。

主な留学生は次の通りである。

藤代眞治：ハーバード講師を経て、現地で矯正歯科医を開業し留学生の世話役

池原止戈夫：東工大教授 (数学)。情報理論の先駆者

下山重丸：国際的庭園家。平安時代の作『作庭記』の翻訳⁴⁾

藤原守胤：慶応大学教授 (政治学、英米法)

野辺地慶三：公衆衛生の父。日本初のレオン・ベルナル受賞者

向坊長英：青山学院大学教授 (神学)

三戸森確郎：東京高等絹糸学校教授、東京農工大名誉教授

正宗一：北海道大学教授、東北大教授、東北薬科大・癌研究所を主宰
杉本修：Y-11（航空機）開発責任者
駒村利三：陸軍航空本部技術部長、陸軍中将

2.6 戦前の最後の期間(1930-1933 学年度)

第 4 冊目のノートを開いた扉のページに This book belongs to The Japanese Student Club of M. I. T. と書いてあり、さらに次のように英文で書かれている。

In case of no resident Japanese students at M.I.T., please leave this book in care of the secretary of the Japanese Students Association of the Greater Boston, Massachusetts.

日本からの留学生がボストンから居なくなる事態が想定できる状況だったわけである。

このノートの最初の記録は 1929 年 11 月 16 日のハーバード大学と MIT の合同集会である。ついで MIT 留学生だけの集会が 2 回あり、1933 年 10 月 21 日の大ボストン日本人学生会と同年 12 月 15 日の座談会の記事が続いており、戦前最後の記事は 1934 年 1 月 5 日の新年会（参加者 20 名）である。ちなみに禁酒法は年末に廃案になっていた。

主な留学生は次の通りである。

都留重人：国際的経済学者。一橋大学学長
広瀬孝六郎：東京大学教授（衛生工学）。上下水道の砂濾過理論
名取順一：早稲田大学教授（安全工学、行動科学）
山田治夫：名古屋工業大学教授
上條勉：三菱重工名古屋航空機製作所
大澤壽人：作曲家。ボストン・オーケストラを指揮した最初の日本人
眞鍋満太：歯周疾患の権威。東京歯科医学講習所・所長
大村勇：青山学院大学神学部長
小田島祥吉：海軍軍医学校 軍医大佐
中川融：国連大使、ソ連大使

この時期にローマ字で名前を書いている日系人が目につくのだが日系人の消息は掴みにくい。情報の得られた人々について生年順に記す。

Ernest Kenichi Moriwake：ハワイの伏見宮記念奨学金ハーバード大へ進学
Oliver K. Noji：MIT で建築学専攻。強制収容所で結婚。収容所で水彩画を展示
Masaji Marumoto：戦後、日系人として初めて米国大審院の判事に就任
John K. Minami：ワシントン州生れ。MIT で建築学（耐震構造）。早大教授
Shizue Komu(結婚後 Shizue Komu Kuramoto)：ハワイ出身。タフツ大医学部卒
Ethel Hideko Omori：ハワイ出身。タフツ大卒、Shizue と同級生
Robert Masayuki Hisamoto：ハワイ出身。MIT で英国との無線通信計画に参加
Kazuko Higuchi：ハワイ出身、留学先不明
George Nakashima：シアトル出身、MIT 留学
Frank Masae Ikuno：カリフォルニア出身、MIT 留学
Semkichi Hamazaki：ハワイ出身、MIT 留学

Utako Yamada : ハワイ出身、留学先不明

日系人学生はどの時期にも居るが、この時期に目立つのは西海岸の排日運動の激しさの影響であろう。

2.7 記録の空白期間(1934-1947 学年度)

1934 学年度から太平洋戦争をはさんで 1947 学年度までの記録が無い。鶴見俊輔(哲学者)が著書にボストン日本人学生会の書記役だったと書いているが、上述したように第 4 冊目のノートの冒頭に MIT 学生会の持ち物だと書いてあるのでハーバード大学に学んだ鶴見はこれではないノートを用いたようだ。そのノートが行方不明である。

なお何かのゲームの結果を書いたメモが残っているので開戦直前期の関係者の一部が分かる。前期からの都留重人のほかに次の人々である。

栗野頼之祐 : ボストン美術館東洋部

川口弘 : 中央大学学長 (ケインズ経済学研究の第一人者)

東郷 (当時、本城) 文彦 : 外務省 (駐米日本大使)

原寛 : 東京大学教授 (植物学)

古畑正秋 : 東京大学教授 (天文学)

2.8 戦後の活動(1948-1954 学年度)

太平洋戦争の終戦後すぐの 1948 年にボストン地区に日本人留学生がやってきた。そして 10 月 8 日金曜日に歓迎会を行うという鮎川弥一が書いた案内状が残っている。

1949 学年度に留学した野島豊志は 11 月 10 日に日本人 8 名とハワイの日系人学生 4 人が集って懇談したと書いている、これが参加者名の分かる戦後最初の集会である。

1950 年 10 月に日本人留学生会を結成し幹事を決めたが会則は作らないことにし、11 月 11 日に全マサチューセッツ州日本人留学生会が約 30 名の参加のもとに発足した。会食に一世と二世を招待し合計で 104 名が参加した。学年度末の 1951 年 5 月まで月例で集会を行った。

1951 学年度も 10 月から翌年の 5 月まで月例で集会を行っている。この集会で東大で国文学を学びハーバード大学で日本学を立ち上げたエリセフ Elisseeff 教授、その教え子のライシャワー Reischauer 博士、米国海軍のキャンベル Campbell 艦長、GHQ の天然資源局長だったオースチン Austin 博士を講師として招聘するなど充実した活動を行った。出席者に在留邦人が多数居る。

1952 年度はハーバード大学の若手研究者から 20 年振りに共和党が勝った大統領選挙の話の聴き、日米学生による討論会を初めて行って日米両国の諸問題を論じた。またボストン・マラソン選手の激励会など例会は毎回工夫を凝らしている。

1953 年度はエリセフ教授が 2 度目の講演を巧みな日本語で行った。また忘年会、新年会、ピクニックなどを行った。

1954 年度にボストン日本人学生会としての活動は無くなり、ボストン日本会 (Japan Society of Boston) へと発展した。そのボストン日本会の例会の案内状がノートに貼り付けてあるが活動内容は記されていない。このノートの役目が終わったためと受取れる。

主な留学生は次の通りである。

藤代(Huthwaite)素子：戦後『ボストン日本人学生会の記録』を発見
野島豊志：弁護士。ボストン日本人学生会の記録を藤代素子より受領
鮎川弥一：ベンチャー・キャピタリスト。日本人初の MIT 理事
斎藤眞：政治学者、東大名誉教授。父・勇は英文学者
小林規威：日米学生による討論会を主宰。経営学者、慶大名誉教授
道明栄爾：元丸紅、日本鋼管
大谷光紹：浄土真宗東本願寺派法主
緒方四十郎：日本開発銀行副総裁。夫人は貞子は元・国連高等弁務官
小柴昌俊：Rochester 大留学、ノーベル物理学賞受賞
明石陽至：進駐軍の配慮で留学。歴史学者

2.9 ボストン日本人学生会を支えた人々

ボストン日本人学生会を支えたアメリカ人を 10 人挙げる。

Edward Sylvester Morse (1838-1925)：東大教授、大森貝塚発見
Clay MacCauley (1843-1925)：日本ユニタリアン協会代表者。日米協会会長
Edwin H. Walcott (-1913)：ボストン駐在帝国名誉領事
Cyrus Edwin Dallin (1861-1944)：日米協会会長。彫刻家
Herbert George Welch (1862-1969)：朝鮮で布教。活水学院理事
James Haughton Woods (1864-1935)：Harvard 哲学教授。姉崎正治の生涯の友
Harris Kennedy (1873-1956)：Lafcadio Hearn の研究者。自宅に日本庭園
Langdon Warner (1881-1955)：親日家
Sergei Elisseeff (1889-1975)：東大国文科卒。ハーバード大東洋語学部創設
Edwin O. Reischauer (1910-1990)：駐日アメリカ大使

ボストン日本人学生会を支えた主な在留邦人は次の通りである。

山中繁次郎：(大正初期) 山中商会ボストン支店長、ボストン日本人会創設期会長
加藤勝治：(大正から昭和初期) 日本人留学生向け雑誌を発行、米国大学の紹介⁵⁾
石川栄子：大正初期ボストン日本人会のまとめ役。日本美術品商⁶⁾。留学生の母
藤代眞治：(昭和初期) 素子の父。現地で開業し、留学生のたまり場を提供
八橋春通：大正期の山中商会社員で戦時中には美術商を自営。日本人会の領袖

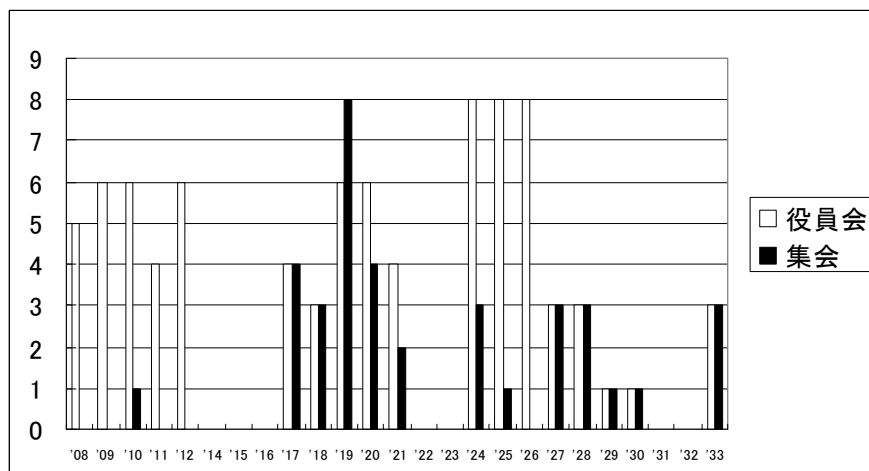
2.10 活動状況の総括

比較的少人数だった終戦前と、大人数となった戦後に分けて活動状況を数値データで示す。

(1) 発足時点から開戦直前までの活動状況

発足時点から開戦直前までについて記録に残っている活動状況を学年度ごとの役員会と集会の回数で示すと図 2.1 のようになる。

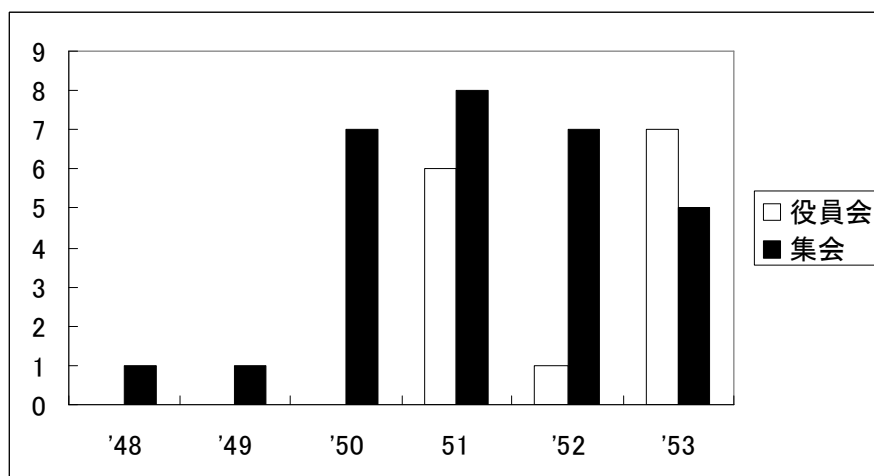
図 2.1 ポストン日本人会の活動状況(1908-1933 学年度)



(2) 戦後の活動状況

戦後の記録から活動状況を学年度ごとの役員会と集会の回数を図 2.2 に示す。

図 2.2 ポストン日本人会の活動状況(1948-1953 学年度)



3 データと分析

『ポストン日本人学生会の記録』に出てくる人々の様子を数値的にとらえて示す。

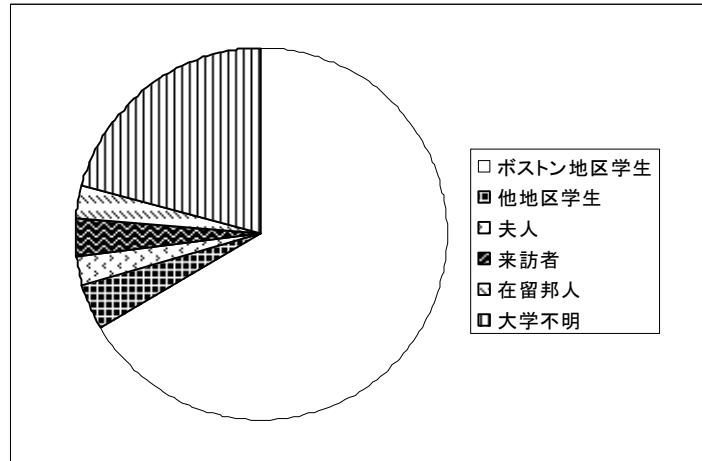
3.1 日本人・日系人

『ポストン日本人学生会の記録』に登場する日本人・日系人は 670 人余であり、80% 強の方々について何らかの個人情報が見られた。日本人か日系人かの区別がはっきりしない人が何人か居るので、ここでは両者を区別しない。

(a) 日本人・日系人の分類

日本人・日系人でボストン地区の大学で学んだ人、その夫人、短期的な来訪者、在留邦人、ボストン地区以外の大学関係者、およびこの分類に入らない人を大学不明者として、その人数比率を図 3.1 に示す。

図 3.1 日本人と日系人の分類

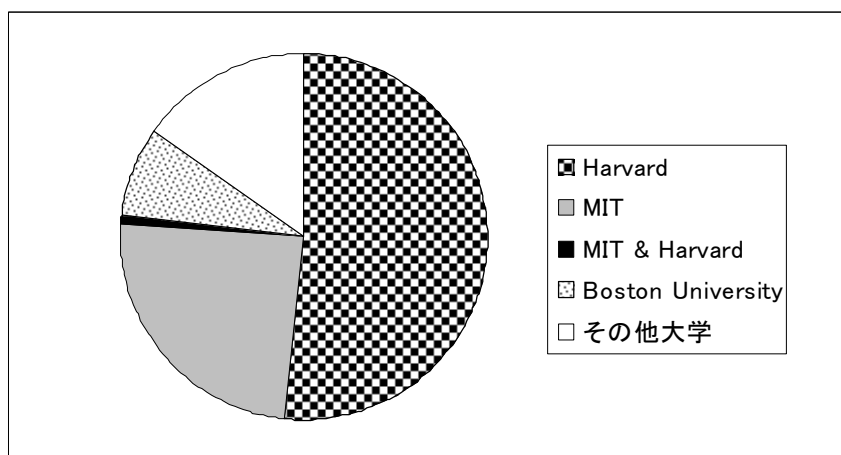


主な来訪者に高平小五郎（駐米大使）、菊池大麓（文部大臣）、新渡戸稲造（思想家）、安倍能成（哲学者）、浜村秀雄と山田敬蔵(ともにボストン・マラソン優勝者)などが居る。

(b) ボストン地区の留学先

図 3.1 でボストン地区大学と分類した人々を大学別に分けて図 3. 2 に示す。ハーバード大学が過半数を超え、MIT (マサチューセッツ工科大学)が約 1/4 であり、これにボストン大学を加えると 85%になる。優秀な学生が著名校に留学したことを示している。

図 3.2 日本人・日系人とボストン地区大学



ところで一人しか留学していない学校にも特徴がある。一例を挙げるとパーキンス学院盲学校に学んだ石原マツという女学生が居る(戦後)、これだけでも感動的である。

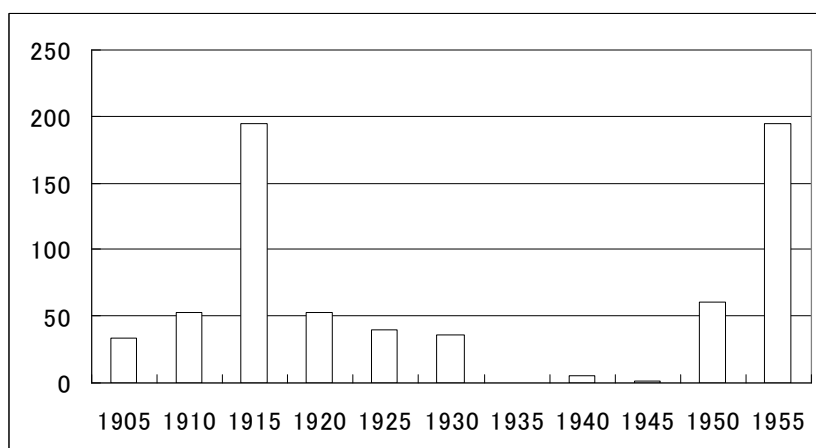
(c) 時代別人数推移

1908 学年度から 1954 学年度までのほぼ半世紀の記録であるが、5 年間毎に区切って、その 5 年間における日本人と日系人の人数の推移を図 3.3 に挙げる。

1910 年代後半が多いのは第一次世界大戦中のため戦時下のヨーロッパに留学できないので、アメリカへの留学に切り替えたためである。

人数が一番多いのは 1950 年代である、その大半はガリオア基金による留学生である。

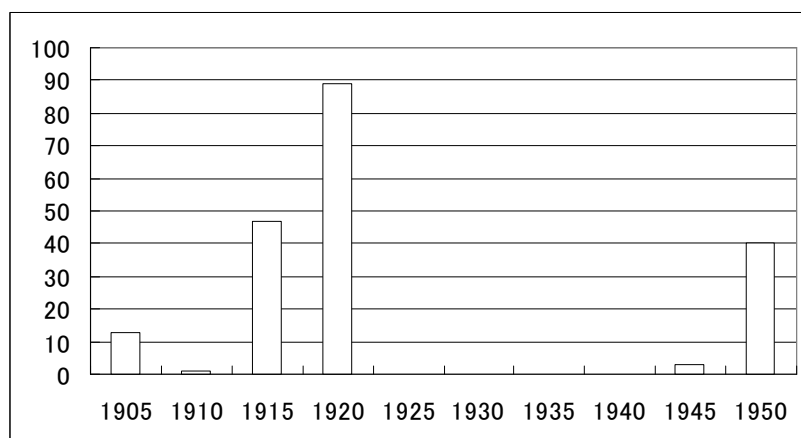
図 3.3 5 年単位で勘定した日本人・日系人の数の推移



3.2 アメリカ人

『ボストン日本人学生会の記録』に登場する外国人（大半はアメリカ人）は 190 人余である。著名人のほかに無名の親日家も少なくない。この中に名前 (first name) がイニシャルであるために追跡不能な方が居る。これらの方々を除くと約 6 割の方々について何らかの個人情報が得られた。

図 3.4 5 年単位で勘定した外国人の数の推移



5年間毎に区切って、その期間における外国人の人数の推移を図 3.4 に示す。1925 年以降終戦までゼロの時代が続く。この背景にアメリカで排日移民法が 1924 年に成立し帰化権を拒否された日本人は入国を禁じられたことが背景にある。つまり親睦目的とは言えアメリカ人に茶話会に参加を求めることが公式に出来なくなったためである。終戦後の 1952 年に法改正が行われて廃案になるまでの 28 年間、日米関係は冷えきったままであった。図 3.3、図 3.4 はまさに日米関係の縮図である。

4 まとめ

明治末から終戦直後までの 40 余年間にボストン地区の大学で学んだ留学生と、その周辺の人々を包括的に紹介した。ボストンはアメリカの学問と起業の一つの拠点であり、現在も留学を目指す人が多い。

これまでに明治維新直後の留学生の研究は数多くなされてきたが明治後期以降は個人の記録を除いて纏った形の留学生の研究を知らない。本史料はその意味で貴重である。

現在『ボストン日本人学生会の記録』原本のノート 4 冊は参考資料 4)、5)、6)とともに公益財団法人・国際文化会館の図書室に保管されている。快く保管に応じていただいた同会館の関係者に衷心より感謝申し上げます。

参考文献

- 1) 鶴見俊輔著『北米体験再考』、岩波新書、1971 年
- 2) 鶴見俊輔、上坂冬子共著『対論 異色昭和史』、PHP 新書、2009 年
- 3) 鶴見俊輔、加藤典洋、黒川創 共著『日米交換船』新潮社、2006
- 4) *Sakuteiki* translated by Shigemaru Shimoyama, 1976
- 5) 加藤勝治著『米國大學と日本學生』博文館、大正 7 年
- 6) 石川栄子編『春水畫品』、(私家本) 大正 15 年